

小さな妹をつれて

小川未明

青空文庫

きようは、二郎ちゃんのお免状日です。お母さんは、新しい洋服を出して、

「これを着ていらつしやい。よごすのでありませんよ。」と、おつしやいました。二郎ちゃんの、いままで着ていた洋服はよごれて、ところどころつくろつてあります。

「お母さん、これでいいよ。」と、二郎ちゃんは、いいました。こないだまで、こんな服は、みつともないといったくせに、きょうは、新しい服を着ていくとはいわぬのです。

「どうしてですか。」

「いいよ、これで。」

「三年生ねんせいになったのですから、新あたしいのを着きていらつしやい。」

「だって、お母かあさん、非ひじょう常時じでしょう。」

「まあ、それでそういうの。」

「なんでも、きようは、これでいいのだよ。」と、二じろう郎ちやんちゃんは、

いいはりました。

「みんなほかの人ひとは、きれいにしていいらつしやるのに、おまえだ

け、そんなふうをしていていいのですか。」と、お母かあさんは、じ

つと、二じろう郎ちやんをごらんになりました。

「だって、僕ぼく、わるいお点てんだと、新あたらしい洋よう服ふくなど着きていつて、

恥はずかしいんだもの。」と、二郎じろうちゃんは、きまり悪わるそうに、い
 いました。

「ああ、それでそういうのですか。考かんえてござんなさい、平ふだ常あそ遊そ
 んでばかりいて、いい成せい績せきのとれるはずがないではありませんか
 。

「僕ぼく、新しん学がく年ねんから、勉べん強きようするのだ。」

「どうですか。」

「ほんとうだよ、お母かあさん。」

「いままでのように、遊あそんではいけませんよ。」

「お母かあさん、これから勉べん強きようするから、丙へいがあつてもしからな

い。」

「丙へいですか、そんなわるい点てんがあると思うおものですか。」と、お母かあさんは目めをまるくしました。

お母かあさんは、これから勉べん強きやうするなら、しからないとお約やくそ束くをして、新あたしい洋やう服ふくを着きせて、二じろ郎うちゃんをお出だしになりました。

二じろ郎うちゃんは、自分じぶんでも、あまりいい成せい績せきとは思おもわれなかつたので、いくつ甲こうがあるかなあと考かんえていました。先せん生せいが、通つ信うしん箋せんをお渡わたしなされると、胸むねをどきどきさせながら開ひらいてみました。体たい操そうが甲こうになっているだけで、あとはずっと乙おつの行ぎやう列れつでありました。二じろ郎うちゃんは、おしどりが行ぎやう儀ぎよく並ならんでいるので、おかしくなりました。しかし、お家うちへ帰かえると、さすがに、

げんき
元気よくこれをお母さんに見せる勇気がなかったのです。お縁
側には、ねこがひなたぼっこをしていました。二郎ちゃんは、

ねこが大好きでしたから、すぐそのそばへすわりました。ねこは
二郎ちゃんを見ると、ごろりと横になつて、あくびをしながら四
つ足をのばしました。

「僕は、体操がうまいんだぜ、ほら甲だろう……。」と、通
信箋をねこの鼻さきにひろげて見せたのです。

こちらのへやで、お仕事をなさっていたお母さんは、二郎ちや
んの声を聞くと、

「二郎ちゃん、帰ったのですか。なぜここへきて、ごあいさつを
しないのです。」と、おっしやいました。

「うん、いまいくよ。」
二郎ちゃんじろうは、ねこの顔かおへ、自分の顔じぶんかおを押しつけてから立ち上たがりました。

二

いいお天気てんきで、日曜日にちようびです。もう、学校がっこうは二、三日にちまえ前から、はじまっています。ご用ようがあつても、二郎ちゃんじろうは、外そとへ遊あそびに出でたぎり帰かえってきてません。新学年しんがくねんから、勉べん強きやうをするといいながら、しかたのない子こだとお母かあさんは探さがしに外そとへ出でられませんでした。

春風はるかぜが吹ふいて、たこのうなりがきこえています。お母かあさんは、
 「二郎じろうは、ここにいませんか。」と、遊あそんでいる子供こどもにお聞きき
 になりました。

「二郎じろうちゃんは、さつき勇ゆうちゃんと原はらっぱの方ほうへいったよ。」と、
 子供こどもは、答こたえました。

どこかの庭にわに咲さいている花はなの香かが、往おう来らいまで流ながれてきます。
 自じ転てん車しゃは、日ひの光ひかりの輪わをかがやかして走はしっていきましました。原はらつ
 ぽには、子供こどもがたくさん遊あそんでいました。お母かあさんは、どの子供こども
 を見みても、自分じぶんの子こに見みえたのです。ズボンみじかを短みじかくはいて、足あしが
 すらりとして、帽ぼうし子よこを横よこにかぶっている十歳さいぜんご前後こどもの子こども供どもたちばか
 りであります。また、お母かあさんは、

「二郎はいませんか。」と、お聞きになりました。

「いませんよ。勇ちゃんのお家へいったのでない。」と、一人の子供が、おしえてくれました。

「ありがとうございます。」

お母さんは、帰りかけながら、お隣の勇ちゃんの家を思い出しました。いま勇ちゃんのお母さんは、お産をして、まだ床についていられました。先日、おみまいにいくと、勇ちゃんの妹の、小さなみい子さんが、

「二郎ちゃんのおばさん、ここ、ここ。」と、無理に二郎ちゃんのお母さんをたんすの前へつれてきました。

「うん、うん。」と、ひきだしを開けるといっているのであります。す

ると、寝ている勇ちゃんのお母さんは、

「みい子のお好きな赤いおべべが、はいつているというのですよ。」と、おっしゃいました。

「まあ、みい子ちゃんの赤いおべべが。」

「赤ちゃんのおべべよりも、きれいだといっていたきたいのですよ。奥さん、どうかあけて見てやってください。」と、勇ちゃんのお母さんが、いわれました。

二郎ちゃんのお母さんは、たんすを開けて、みい子ちゃんの、きれいなおべべをごらんになりました。

「きれいな、いいおべべですこと。」と、二郎ちゃんのお母さんが、おほめになりました。

「みい子おべべ。」と、みい子ちゃんは、しきりにいつて、こんどは、これをきせてくれというのです。しかし、それは単衣物ひとえものでありました。

二郎ちゃんのお母かあさんは、そのときの無邪気むじゃきなみい子ちゃんのようすを思い出して、ひとりほほえみながら、歩いていられた。

三

二郎ちゃんじろうは、勇ちゃんゆうの家いえにもいませんでした。二郎ちゃんじろうと勇ちゃんゆうは、小ちいさなみい子こちゃんをつれて、川かわへ釣つりに出でかけ

たのです。それは、勇ちゃんゆうと二郎ちゃんじろうの釣りにいく約束やくそくがしてあつたところ、

「勇ちゃんゆう、すこしみい子こを見てやつておくれ。」と、寝ねているお母さんかあにいわれたので、妹いもうともいっしょにつれていくことにしたので。途中とちゆう、勇ちゃんゆうは、小さな妹いもうとの手をひいてやりました。生まれてはじめて、広いひろ、青々あおあおとした畑はたけを見たので、みい子こちゃんちやんは、なにを見ても珍めづらしかったのです。花はなびらが、風かぜに吹ふかれて飛とんできても、

「ちようちよう、ちようちよう。」といつて、よろこびました。川かわへくると、ほかの子供こどもたちもおおぜいいました。

「二郎ちゃんじろう、あすこがいいよ。」と、勇ちゃんゆうが、川かわの曲まがり

角^{かど}をさしました。そこには、おじいさんが、釣^つりをしていました。じろう二郎ちゃん、勇^{ゆう}ちゃん、おじいさんのじやまにならぬように、すこしはなれて糸^{いと}を下^さげたのです。

「あ、二郎^{じろう}ちゃん、引^ひいたのではない。」と、勇^{ゆう}ちゃんが、いいました。

「ごみが、ひっかかったのだよ。」と、二郎^{じろう}ちゃんは糸^{いと}を^あ上げて、ごみを取^とりました。

「兄^{にい}ちゃん、もう帰^{かえ}るの。」と、みい子^こちゃんが、泣^なき声^{こえ}を^あだしました。

「ばか、いまきたばかりじゃないか。」
みい子^こちゃんは、しかたなく一^{ひとり}人で遊^{あそ}んでいました。

「もうお家へ帰るの。」と、またいいだしました。二郎ちゃんが、ふり向いて、

「みい子ちゃん、一匹釣れたら帰ろうね。」といいました。

「みい子のばか。」と、勇ちゃんは、しかりました。すると、みい子ちゃんは、わあわあと泣き出したのです。

「あちらへ、つれていって。」と、おじいさんが、いいました。勇ちゃんも、二郎ちゃんも、おじいさんの顔を見ました。そして、みい子ちゃんをつれて、ほかのところへ移りました。

「二郎ちゃん、僕、先へ帰るから。」と、勇ちゃんがいいました。「僕も、いつしよに帰るよ。」と、二郎ちゃんも、帰る支度をしました。

三人は、また田圃道を歩いて、往来へ出ました。

「兄ちゃん、おんぶして。」と、急にみい子ちゃんは、道の上へ

しやがんでしまいました。

「困ったなあ。」と、勇ちゃんは、小さな妹を負いました。途

中で、二郎ちゃんが、代わってやりました。しかし、二人とも

疲れてしまいました。みんなは、おなががすいたのです。このと

き、二郎ちゃんが、ポケットに手を入れると、昨日お母さんが、

明日の朝忘れるといけないとていいって、お渡しになった月謝

が入っていました。

「勇ちゃん待っておいで。」と、二郎ちゃんは、どこかへ向かっ

て、走り出しました。そして、道端のお菓子屋から、キヤラメ

ルを買かつてきて、みい子こちゃんにも、勇ゆうちゃんにも分わけてやりま
した。三人にんは、やつと元げん気がついで、歩あるくことができたのでした。
その晩ばんのことです。二じろう郎ちゃんは、月げつ謝しゃのお金かねを使つかつてしま
つて、どういっておわびをしていいかと苦くるしんでいました。ちよ
うどそのとき、

「ごめんください。」と、玄げん関かんで声こえがしました。お隣となりの勇ゆうちや
んのお父とうさんがいらしたのです。

「お礼れいに上あがりました。きようは二じろう郎ちゃんに、うちの子供こどもがた
いへんお世せ話わになりました。」と、おじさんは、お礼れいをいって、
月げつ謝しゃの金かねを返かえしにきてくださったのです。二じろう郎ちゃんのお母かあさ
んも、お父とうさんも、はじめてそのことを知しつて、すぐがいいお返へ

事もできず、ただおたがいさまどうしですからと、笑つていられた
 ました。しかし、おじさんがお帰りなされると、

「おまえは、いいことをしました。そんなときは、自分の力で
 きることなら、なんでもしなくてはなりません。」と、お父さん
 は、二郎ちゃんをおほめになりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「小《ちい》さな妹《いもうと》をつれて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小さな妹をつれて

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>